現代社会における自然、特に山や森林とのつきあい方の再考

―神奈川県相模原市の事例から―

沖山　彩未（靏　理恵子ゼミナール）
HS19-1061J

目次

第1章　はじめに
　第1節　研究動機
　第2節　研究目的
　第3節　研究方法および本論の構成
　第4節　先行研究の整理
第2章　森林を概観する―森林をめぐる現状と顕著な働きかけの事例―
　第1節　日本の森林情報
　第2節　相模原市の森林情報
　第3節　自伐林業とは何か
　第4節　先進的な森林ボランティアの事例
第3章　地方自治体の森林政策―相模原市と愛知県豊田市との比較考察―
　第1節　相模原市の事例
　　第1項　「さがみはら森林ビジョン」
　　第2項　「(仮称)相模原市市民の森基本計画」
　第2節　愛知県豊田市の事例
　　第1項　豊田市の概要
　　第2項　「新・豊田市 100 年の森づくり構想」
　　第3項　「Tomori」の活動
　第3節　両市の施策比較と考察
第4章　森林に働きかける人々
　第1節　市民と森林とのつきあい方
　第2節　森林と関わる企業
　第3節　森林ボランティアの例から見る、主体的に動く市民
第5章　森林と「開かれたコモンズ」
第6章　おわりに
注、参考文献・参考 URL

1　はじめに

筆者が生まれ育った神奈川県相模原市は、市町村合併を経て市域の 6 割が森林となったことで、森林への施策が顕著な自治体である。相模原市に限らず、人によって管理・利用されていない森林が多く存在することが問題として注視されている。この問題を解決するためには、何より人々の関心が森林に向く必要がある。期待を込めるならば、森林を通して人同士の繋がりが生まれること、つまり森林をコモンズとして捉えることが出来るのである。

本論は、森林にコモンズ論を用いることの意義を追求することを目的とする。コモンズ論は井上(2001)による定義を用い、島田・室田(2010)によって論じられた「開かれたコモンズ」というキーワードを軸に論を展開する。主眼は相模原市に置き、他の自治体の事例を紹介することで相模原市の特徴を明らかにする。また、フィールドワークを実施した中で得られた知見を活かし考察を行い、研究を行うこととする。

2　森林を概観する―森林をめぐる現状と顕著な働きかけの事例―

日本全体の森林も相模原市の森林も、双方ともに手つかずの森林問題を抱え、国や地方自治体は解決に向けて施策を講じている。同時に、そうした問題を解決することに貢献している他の要素として、自伐林業と森林ボランティアについて紹介した。相模原市には家族単位で林業

を行う自伐林業への支援を行い始めていて、森林ボランティア団体も多く存在している。ここでは相模原市以外の事例を取り上げることで、その先進性を示した。

3　地方自治体の森林政策―相模原市と愛知県豊田市との比較考察―

相模原市との比較の対象として選出した愛知県豊田市は、相模原市と同じく市町村合併の段階で森林の面積が増大した背景がある。それぞれの施策の違いを比較することで森林への考え方の差異を発見した。相模原市は、「市民の森」を作るための計画を進めるなど市民が積極的に関わる場を作ることに注力している。そこから、相模原市は森林との関わりが薄い市民でも気軽に親しめるような森林を作ることに重きを置いていることが特徴であると言える。

4　森林に働きかける人々

民間の側に目を向けると、森林に厚く手をかける人が多い。それは林業を営んでいたり、ボランティア団体であったりと形は様々である。フィールドワークを実施した公文書館では、合併前に森林政策に携わっていた職員の方に話を伺い、ボランティア団体の積極性を垣間見た。そこから得られた知見を活かし、研究を進め、それぞれの団体の特徴や思いを明らかにした。相模原市で活動をする人々に積極性があること、そこからさらに関心のある人を増やすことが出来る可能性があることを考察した。

5　森林と「開かれたコモンズ」

本論では森林が様々な形でコモンズとなり得ることを確認した。それは森林だけに限ったことではない。前山(2015)が説明したように、街中にあるベンチや道路、公園といったものは「地区コミュニティコモンズ」と呼ばれ、私たちの生活に密接に関わっている。自分も主体的に参加し、みんなで作り上げているという背景があると、自ずと街を大切にするようになり、結果的に生活が豊かになる。これが街中のものにコモンズ論を用いる意義と重要性である。

これを森林に目を向けて考えると、全国的に問題視される「放置される森林問題」を解決する近道になると言える。さらに、これまで関心を持たなかった人が関与することで、そこに人同士の関わりが生まれる。これがより一般的なこととなるには、現時点で関心を抱いて自然との関わりを大切にしている人々が広めていく必要がある。そのため、本論でこれまでに確認してきたことは大切なことであったと言える。

6　おわりに

本論では、森林と人との関係を再考することを目的に、主に相模原市の事例を用いて現状と将来の展望を明らかにしてきた。森林を通して人々の繋がりが強まることも森林を守る一つの目的であることが分かり、これは本研究の成果であった。もっと多くの人に話を聞かなければさらに深い部分は明らかにすることが出来ないが、多く存在する森林に働きかける人々の団体が今より一つにまとまっていけば、さらに市民を巻き込む力となるかもしれない。今すぐは難しいかもしれないが、その動きに期待したい。

主要参考文献

井上真 (2001)「自然資源の共同管理制度としてのコモンズ」、井上真・宮内泰介編『コモンズの社会学　森・川・海の資源共同管理を考える』、新曜社。

嶋田大作・室田武 (2010)「<研究論文>開放型コモンズと閉鎖型コモンズにみる重層的資源管理 -ノルウェーの万人権と国有地・集落有地・農家共有地コモンズを事例に-」、『財政と公共政策』2010 年 10 月、48 巻、77-91、財政学研究会。

前山総一郎 (2015)「都市のコモンズ　その起源と現在－都市コモンズを支えるコモンズ化 (commoning)－」、『都市住宅学』、2015 年 2015 巻 90 号、4-11、公益社団法人　都市住宅学会。